

## 5年 「日本は世界のどこにある？」にプラスワン

(教科書では『小学社会5上』p.4~13)

### 1 資料の使い方や発問・指示を工夫して、児童の主体性を引き出す

第1単元「わたしたちの暮らしと国土」のオリエンテーションには、宇宙から見た地球の姿をとらえた写真が載せられている。教科書では、この写真と、地球儀や地図とを見比べながら、気づいたことを話し合う活動が設定されているが、次のような活動をプラスワンすると児童の意識はより高まる。

#### (1) 地球の特徴を考える

T) もし、宇宙人がいて、地球の近くまで来たら、この星はどんな星に見えるでしょう。

そう発問して、『宇宙から見た地球の特ちょうを考えよう』と板書する。まずは地図などを見ないで、知っていることを言わせていく。

C) 丸い形をしている

C) 青い

C) 緑色

色についての発言が出てきたら、「どこが青で、どこが緑ですか？」とたずねる。児童は「海が青で、陸が緑」と答えるはずだ。さらに「青と緑はどちらが多いでしょうか？」と考えさせ、海が10分の7、陸が10分の3と教える。

ここで、教科書に出ている宇宙から見た地球の写真を見させると、「茶色も多い」という声が出てくるだろう。緑色は陸地の一部で、茶色の砂漠や荒れ地が意外と多いことがわかる。

このほかに「大きい」「きれい」という反応も出てくるかも知れないが、他の星と比べると決して大きいとは言えないことや、「きれい」という感じ方も人によって違うので明らかな特徴とは言えないことも話すとよいだろう。なお、宇宙から見た写真の地球の色は、人々の通念にもとづいて、電子的な処理が施されていることが多い。

#### (2) 世界の大陸と海洋を調べる

写真では、地球全体を一度に見ることができない。そこで、世界地図を提示する。地球儀ではグループの一つすら与えることが難しいと思うが、地図帳なら全員が持っている。全員に作業をさせたいときには地図、新たな視点で地球を見させるときには地球儀、と使い分けるとよいだろう。

T) 陸は大きな陸地「大陸」が六つあります。海は大きな海が三つあります。それぞれの名称を地図で調べて、白地図に書きましょう。

白地図を配って書き込ませる。「太平洋」の「太」を「大」と書いている児童が多かったので、答え合わせの時に強調して指導した。「太平洋」という名称は、マゼランが「平和の海」と名付けたのを和訳したものである。

次に、海洋と大陸を面積の大きい順に並べる活動をプラスワンする。

T) 三つの海と六つの大陸を大きい順に並べましょう。

簡単な海洋から答え合わせをする。①太平洋、②大西洋、③インド洋の順である。インド洋を第2位とする児童が結構いる。

難しいのは大陸だ。容易にわかるのは1位のユーラシア大陸だけである。

ここで、ユーラシアはヨーロッパ（ユーロ）とアジアを合わせた言葉だと教えるとよいだろう。こうしたミニ知識を要所要所で教えることが児童の知識欲を高める。

2位以下は、「アフリカ」「北アメリカ」「南アメリカ」「南極」「オーストラリア」と続く。

けれども、2位を「北アメリカ」や「南極」にしている児童もいるはずだ。地図で見ると、南極は広大な陸地に見えるからである。

T) 地球儀で確かめてみましょう。

地球儀で調べる必然性が生まれたところで、地球儀を与える。

地球儀で見ると、アフリカがかなり大きく見える。グリーンランドは、地図ではオーストラリアよりも大きく描かれていることが多いが、地球儀だと実際はかなり小さいこともわかる。

ここで、地図では、北極・南極に近い所を引き伸ばしているため、実際の面積とは違うということを教える。

この時間には、「写真」「世界地図」「地球儀」の三つの資料を使うが、一度に見せるのではなく、児童の思考の流れや活動内容に合わせて提示していくことで、児童の主体性を引き出すことができる。

## 2 主な国名と国旗はクイズ形式で楽しく覚える

この単元では、「世界の主な国々の国名・位置・国旗を調べ、理解すること」もねらいに入っているが、一度ではなかなか覚えきれない。次のような工夫をプラスワンするとよいだろう。

あらかじめ20ほどの国の国旗を、画用紙に印刷しておく。国旗の画像は、少し調べればインターネットで簡単に手に入れることができる。それをフラッシュカードのように提示して、言わせていくのである。

初めは、アメリカやイギリスのようによく知られているものから始めていく。誰でも答えられるものから始めた方が、児童の関心や意欲が高まる。

イギリスはイギリス人や英語を表す「イングリッシュ」を日本語にしたもので、海外では「UK」や「グレート・ブリテン」と呼ぶことが多いことなども教えると、国名に対する関心も高まる。

フランスとイタリア、オーストラリアとニュージーランドのように似ているものは2枚一緒に見せ

るとよいだろう。

この活動は一度だけでなく、授業の初めに何度か行うようにする。初めは全員に対して行うが、挙手で発言させたり、列を指名して前から順に発言させたりすると、覚えようという意識が高まるだろう。



### 3 領土をめぐる問題を考える活動をプラスワンする

日本の領土についての学習が、教科書でも大きく取り上げられるようになった。教科書では、本文で北方領土が、コラムで竹島と尖閣諸島が取り上げられ、「ソビエト連邦（今のロシア連邦）が不法に占領」「韓国が不法な占拠を続けています」といった記述がみられる。ここに新たな資料を追加し、領土問題を解決していくにはどうしたらよいか、児童の主体的な思考を引き出してみたい。

#### (1) 現在の北方領土の様子を調べる

みなさんは、北方領土に現在どれくらいの人々が暮らしているかご存じだろうか。

北方四島のうち歯舞群島にはだれも住んでいないが、残る3島には17,000人近いロシア人が暮らしている。

以前はインフラが整わず、不満をもつ島民が数多くいたが、現在は地元のサハリン州を中心に、水道、道路、飛行場、病院などの整備に力を入れているようだ。慢性的な電力不足に悩んでいたが、地熱発電や風力発電が盛んになっているという。

	一般住民（人）	
	ソ連占領前(1945年)	現在(2013年)
択捉島	3,608	6,606
国後島	7,364	7,355
色丹島	1,038	2,913
歯舞群島	5,281	0
合計	17,291	16,874

(千島歯舞諸島居住者連盟／連邦国家統計庁サハリン州局調べ)

魚の加工場や地震研究施設を日本と共同開発したいと、前向きに考えている住民もいないわけではないが、開発が進むにつれて大部分のロシア人は日本への返還に拒否感を抱いている。

「今住んでいる人たちの墓の数は、既に元島民の日本人以上になった。島はもはや私たちの故郷だ。日本に返すわけにはいかない。」と語る住民もいる。ロシアが北方領土の実効支配を始めて70年がたった。長引けば長引くほど、問題解決はいつそう難しさを増していくように思われる。

こうした情報を提示すると、児童の考え方が変わってくる。

## (2) どうすれば北方領土問題を解決していけるか考える

T) どうすればこの問題を解決できるか考えよう。

各自で問題解決の方法を考える。一人で考えるには難しい内容なので、近くの友だちと話し合ってもよいこととする。

C) ロシア人と日本人と一緒に暮らせばいい。空港をつくれれば行き来もしやすくなる。

C) 一緒に暮らすとよくないこともあるだろうから、それぞれの島の中を二つに分ければいい。

C) うまく分けないと問題が起きる。

C) 日本が住みやすくするかわりに、半分住まわせてもらう。

C) 歯舞群島には誰も住んでいないから、歯舞だけ返してもらえばいい。

C) もともとは全部日本の領土なんだから、島は返してもらって、ロシアが作った機械や設備は引き続きロシアが使っていていいということにする。

C) いっそのこと誰も住まない無人島にすればいい。

T) 君たちが考えたことは、大人の人たちの考えと同じです。一緒に暮らせばいいというのは「共同統治」、一部だけ返してもらうというのは「部分返還」、全部返してもらうのは「全島返還」。日本政府は「全島返還」を目標としているので、「部分返還」の提案は拒否しています。

児童の考えに価値づけをすることで、「考えてよかった」「発言してよかった」と感じさせていく。日本政府の主張はあくまでも「全島返還」だということをおさえる必要があるが、様々な主張の中から、どの主張を選択していくかを考えることも、主権者教育につながる大切な活動だと思う。

最後に、学習の終わりに児童が書いた文を紹介する。

A児：今、択捉島などの周りにロシア軍がいるので、かんたんに島に行けないから、まずは、だれでもかんたんに島に入れるようにしてくれればいいと思う。島には、ロシア人だけが住んでいると思うが、島を返してもらっても、日本人だけが住むのではなく、いっしょに使えばいいと思う。

B児：ロシアの方たちのふるさとでも、日本人のおはかだつてあるから、日本のふるさとでもある。ロシアだけのふるさとではない。だから、いっしょに住みたい。どうしてもダメなら、分けてくればいい。でも、本当は返してほしい。

(2016年4月)

あらし げんしゅう  
嵐 元秀

東京都の公立小学校教師。教師歴28年。

楽しみながら、調べ・考え・表現する力が高まっていく社会科授業を目標として研究・実践をしている。